



キバナコスモス

るべき所でした。離散した人々は苦しい日々の中で、故郷を偲び、**都に上る** ことこそ念願であり、可能となれば、最大の喜びと期待で胸が躍ったでしょう。私の祖父の家には祖父が働いていた職人やその妻、弟子たちを連れて、30人ほどで、津軽から遠い伊勢まで一世代の「お伊勢参り」をした記念写真が飾ってあります。祖父は喜びと誇りに満ちた晴れ晴れとした顔をしています。

詩人は **苦難の中から主を呼ぶと(1)** と歌い出しています。苦難とは **偽って語る唇から、欺いて語る舌から(2)** のように、嘘、欺瞞、不正など信用のおけない世界に生きていることです。また、**勇士の放つ鋭い矢よ／えにしだの炭火を付けた矢よ。(4)** のように憎しみ、争い、戦いなど命の危険に満ちている世界に生きていることです。その中で詩人は主を呼び求め、**主はわたしに答えてくださった。**

(1) と、**都に上る** ことが可能となったと喜んでいます。

けれども、そのような世界で生きざるを得なかった自分は、そのような世界の一員でもあります。主を畏れて、詩人は **主はお前に何を与え／お前に何を加えられるであろうか(3)** と、おののいています。**わたしは不幸なことだ／メシエクに宿り、ケダルの天幕の傍らに住むとは／平和を憎む者と共に／わたしの魂が久しくそこに住むとは。(5)** 詩人の正直な気持ちが率直に述べられています。**メシエク** とはノアの末息子ヤフェトの一族が住む土地とされ、BC9世紀にはアッシリアの西の果てと見なされていた場所です。時代とともに西へと伸びて、ヨーロッパの地、辺境で野蛮な土地と考えられていました。**ケダル** とはアブラハムが女奴隷ハガルに産ませた息子イシュマエルの次男の名で、この名を用いることは「戦いに長け、商いを生業とする人々」を暗示していると思われます。彼らは **平和を憎む者** なのです。それに対して、詩人は **平和をこそ、わたしは語るのに／彼らはただ、戦いを語る。(7)** と、自らは心から **平和** を願い、その思いを語っても、異邦で共に暮らす民には受け入れられないことを憂えています。詩人はおののきつつ **都に上る** 道が与えられたことを感謝し、**主よ、わたしの魂を助け出してください(2)** と祈りながら、巡礼の長い旅路を進み始めているのです。これは2000年以上前に歌われた詩編でありながら、私たちの現状とも似ています。詩人と同じく、諦めず、**平和** を願い、私たちも歩みを進めたいと思わせられます。

『讚美歌 21』には関連讚美歌はありません。私は、詞:パウル・ゲルハルト 曲:シュテファン教会少年合唱団出身のヨハン・M.ハイドンの528「あなたの道を」 <https://www.youtube.com/watch?v=C1Fs41qehnE> をこの詩人に贈りたいです。ジュネーブ詩編歌は素朴なオルガンと、ピオラ・ダ・ガンバの演奏です。

<https://www.youtube.com/watch?v=gbLPrOMWwnM&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=120>